

英語教員全員が大学院修士課程の修了を  
—足利市英語教育推進プロジェクト会議で考える—

開倫塾  
塾長 林 明夫

1. おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
2. 今朝は、英語の先生の実力をどのようにつけるかというお話をさせていただきます。私は、足利市の教育委員会の中にあります「足利市英語教育推進プロジェクト会議」のメンバーの一人にさせていただきます。この会議は去年の12月からスタートして、毎月1回非常に熱心な議論をしています。座長の先生は、英語教育の第一人者といわれている上智大学の吉田研作先生です。副座長の先生は、群馬国際アカデミーで中学校と高等学校の校長先生をされている小笠原敬三先生です。私はそのメンバーの一人です。
3. 今週の5月14日・月曜日には、英語の先生の英語力・指導力の強化をどのようにしたらよいか、これからの英語の先生に求められる英語力・指導力とはどのようなものかについての議論をしました。今はグローバル化社会ですので、英語の先生に対する期待が非常に大きくて、生徒の英語力の向上を図るためには英語の先生の力が必要です。また、英語によるコミュニケーション能力の重要性も大事で、最終的には英語について授業をする、英語で授業をするという形まで段々レベルが上がっていくと思います。ですから、子どもたちの英語によるコミュニケーション能力をもっともっと充実させるために、まずは先生に力を付けてもらいたいという議論でした。
4. では、先生にどのくらいのレベルまで力を付けてもらいたいかといいますと、私の個人的な考えですが、実用英語技能検定(英検)であれば1級を取ってほしい。準1級でもよいのですが、英語の先生ですので、できれば1級を取っていただければと思います。もし1級を取っていない方は、1級を目指して頑張ってもらいたいと思います。また、TOEICでしたら、できれば900点以上は取っていただかないと英語の先生としてはなかなか大変かと思います。たとえ中学生・小学生に英語を教える先生でも、自分の英語の力を強化するために英検1級、TOEICでしたら900点以上を取っていただきたいと思います。それも、大学生のときに取得して以来20年も受けていないというのではなく、毎年1回は英検やTOEICを受けていただいて自分の英語の力を身に付けてもらいたいと思います。
5. 私は、何年か前にフィンランドに行って色々なお話を聞いてきました。フィンランドでは、学校の先生には2種類あるということです。1つはクラスルームティーチャーです。小学校1年生から4年生までを教える先生をクラスルームティーチャーといい、この先生方は小学生に多くの科目を教えます。2つめはサブジェクトティーチャーです。フィンランドでは、小学校5年生から高校3年

生までをサブジェクトティーチャーが教えます。サブジェクトとは科目という意味ですので、専門科目を教えるティーチャー(先生)が小学校5年生から高校3年生までを教えます。日本の場合は中学校と高等学校を教えるのは専門科目の先生ですが、フィンランドは小学校5年生から高校3年生までを教えるのがサブジェクトティーチャー、専門科目の先生です。例えば、英語のサブジェクトティーチャーであれば、小学校5年生から高校3年生までのどの学年でも、どんなレベルでも、非常に高度なレベルでも、教えることができるのが専門科目の先生、サブジェクトティーチャーです。例えば、英語の勉強がなかなか大変な生徒で学年相応の英語力が身に付いていない生徒にも、その生徒に合わせて教えることができる、これが専門家としての科目の先生、英語であれば英語の先生であるといわれています。そのために、フィンランドでは大学に3年間行き、そのあとは大学院の修士課程に2年間行ってマスター、修士号を取り、高度な専門職として小学校5年生から高校3年生までを教える、これが英語の先生であり、また、専門科目の先生なのです。また、小学校のクラスルームティーチャーでも大学院修士課程修了者でないと教員にはなれないのがフィンランドです。

6. 翻って、日本の場合は、英語の先生で大学院の修士課程を出ている先生は非常に少ないといわれています。小学校の先生もそうですが、中学校・高等学校の先生でも大学院を修了している方はあまり多くないといわれています。フィンランドのことを度々お話して申し訳ありませんが、世界で一番学力が高い国といわれているのがフィンランドですのでこのような話をしているのですが、フィンランドでは、学校の先生はすべて大学院の修士課程を出ているのです。日本の場合には、高等学校の先生でも10%ぐらいしか大学院を修了していません。日本の教育の一番の課題は、先生のレベルを上げることです。レベルを上げるために一番よい方法は、大学院の修士課程まで修了させることです。

7. では、今の先生をどのようにしたらよいかというと、フィンランドの先生に負けないように、英語の先生であれば英語の専門性を高めるために大学院の修士課程に行ってもらいたいというのが私の考えで、「足利市英語推進プロジェクト会議」でも主張させていただきました。足利市には英語の先生が何十名かいらっしゃいますが、その方々にたとえ3、4名でも代わり番に大学院の修士課程で勉強していただきたいと思います。上智大学やテンプル大学、神田外語大学などいくつかの大学には、第2言語としての英語教育という専門科目があり修士課程があります。足利市の英語の先生全員がそこに代わり番に行って、大学院の修士課程を修了していただければ、先生のスキルが相当上がりますので、そのようなことをやっていただきたいとお願いしました。もし1年間が大変であれば、新潟県にある国際大学でしたら3か月間で済むような簡単なコースもありますし、また、それでも大変であれば、栃木県の教育委員の方々々と相談しながら足利市の教育委員会の中に大学院の修士課程のようなものを作っていただき、1年間ではなく、3、4年かけてゆっくと修士課程修了程度のを勉強していただければ、子どもたちの英語の能力も上がるのではないかと思います。日本人の英語の力が劣るのは英語の先生に原因があるというのが私の考えですので、第4回の「足利市英語教育推進プロジェクト会議」でこのような主張をさせていただきました。

8. 皆さんはどのようにお考えでしょうか。

— 2012年11月23日林明夫記 —